

Title	組織的知識創造研究のための理論・方法論的アプローチの検討：物語研究と質的研究手法についての研究
Author(s)	吉永, 崇史
Citation	知識創造場論集, 4(5): 45-79
Issue Date	2008-03
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/5137">http://hdl.handle.net/10119/5137</a>
Rights	
Description	北陸先端科学技術大学院大学 21世紀COE プログラム 「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」

# 組織的知識創造研究のための理論・方法論的アプローチの検討 —物語研究と質的研究手法についての研究—

吉永崇史

北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター研究員

## Abstract

本論では、新たな視点と方法論によって組織的知識創造研究を推進する目的で、“物語研究”及び“質的研究手法”に関する既存の研究についてのレビューを基にした理論的・方法論的アプローチの解明を試みた。まず理論面については、組織論における物語研究について検討した結果、組織的知識創造理論には、組織学習論、ナレッジ・マネジメント論、組織変革論の3つが密接にかかわり合っていることを明らかにし、それらを横断した理論的アプローチの必要性を示した。さらに、文学や心理学で行われている物語それ自体を対象とした研究について検討した結果、物語が“問いかけ”や“自他の関係をつなぐ”ものとしての機能を持つことを明らかにし、この2つの視点を組織的知識創造理論に積極的に取り組む必要性を示唆した。その上で、組織的知識創造研究を、「個人と組織を同時に研究対象とし、個人の“ものの見方”の発展的な変化のプロセスと、“問いかけ”や“自他の関係をつなぐ”組織的行為を通じた当プロセス促進要因について明らかにする研究」と定義した。一方、方法論についてのレビューでは、ポストモダン・パラダイムについて考察を行うとともに、組織的知識創

造研究に有効な手法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチについて詳細に考察を行った。さらに、グラウンデッド・セオリー・アプローチを核としながらも、個的縦断研究法、拡張的学習理論にもとづく事例記述手法、PAC分析手法を組み合わせた、組織的知識創造研究に資する独自の科学的方法論を提案した。

**Keywords:** 組織的知識創造理論、物語研究、質的研究手法

## はじめに

経営学の分野によって開発・提案された組織的知識創造理論（例えば、Nonaka & Takeuchi, 1995）は、今ではナレッジ・マネジメントのコア理論の1つとして、経営学を超えて工学、医・看護学、教育学など幅広い分野で認知、活用されている。組織的知識創造理論は元来、「なぜ日本企業は成功したのだろうか？」（訳 p.1）の問いに答えるための理論である。既存の経済理論、組織論（日本的経営論）、経営戦略論、人間関係論（リーダーシップ論）を基盤としつつも、さらに東西哲学で醸成された知見と対応づけ、学問領域を超えた諸理論の統合が試みられた。その結果、彼らは、日本企

業は欧米企業にないイノベーションを連続的に起こすための“型”があることを発見し、その型を、Socialization、Externalization、Combination、Internalization の 4 つの知識変換モードから構成される組織的知識創造プロセスモデル (SECI モデル) として構築し、提案した。本論では、組織的知識創造研究について新たなアプローチを検討する目的で、物語研究 (narrative research)、及び質的研究手法 (qualitative research method) についての既存研究についての考察を示す。さらに、考察によって得られた知見をベースに開発した、組織的知識創造研究に有効な科学的な研究方法 (research method) を提案する。

組織的知識創造理論をベースとした研究は、いくつかの例外を除いて (例えば永田, 2000; 犬塚, 2005)、統計分析を用いた量的研究手法よりはむしろ質的研究手法、なかでも事例記述型研究 (ケース・スタディ、以下、事例研究) 手法が用いられてきた (例えば妹尾 et al., 2001; Nonaka & Peltokorpi, 2006; Peltokorpi et al., 2007; Keursten et al., 2006)。その理由として、下記の 3 つが考えられる。まず、当該理論において知識は「個人の信念が人間によって真実へと正当化されるダイナミックなプロセス」(Nonaka & Takeuchi, 1995, 訳 p.85) と定義されている。その定義に慕えば、個人が生み出した新しい知識そのものは主観的なものであるから、定量的に捉えるのは難しいとの認識がある。2 つ目は、知識創造のメカニズムを静的にではなく動的に捉えるための定量分析手法が十分に確立されていないことがある。最後に、当該理論の背景には、ポストモダン研究アプロ

ーチ (林, 2004) による現実 (reality) の捉え方—客観的に存在する真なる現実はなく、全ての現実は間主観的に構成されたものである—があり、本質的に統計分析が志向する個の主観性の捨象になじまない。これらが、事例研究手法が当該理論にもとづく研究に多用されたこと背景にある。

しかしながら、当該理論にもとづく既存の事例研究手法が十分に“科学的”であったかという点に疑問がある。Wilber (1998) は次のように科学的探究の 3 つの要素を提示している。すなわち、1) 「介助的指示」: 実験ないしデータ収集の際の手順、2) 「直接的感受」: 指示によって提示された領域の直接的な経験ないしデータの感受、3) 共同体的確認 (または否認): 「指示」と「感受」の要素を充分満たした他の人々と結果を照合する (訳 pp.202-203)。彼が示した科学的探究の要素に照らし合わせると、既存の事例研究では、1) の「介助的指示」が明確であったとは言い難い。即ち、明示的で体系立った「指示」を基盤とした研究アプローチを、従来の当該理論にもとづく質的研究では志向してこなかったのではないだろうか。

上記の課題に基づき、本論では、経営学、文学、心理学の分野における物語研究についての研究動向をレビューして理論的アプローチを検討するとともに、それをベースとした組織的知識創造プロセスの解明のための新たな「介助的指示」、つまりデータ収集・分析における事例研究手法を超えた質的研究手法について提案する。今回提案する方法は、心理学、社会学、教育学で既に開発されている複数の手法を組み合わせたものであるが、これらの手法を実践する際

の応用、どの手法をどのような順番で活用すべきか（手順化）、さらに方法論間の関連付け（構造化）について独自性がある。

本論の構成は下記の通りである。まず、1章において、組織的知識創造理論の属する主領域である経営学、特に組織論分野での既存の物語研究についての理論的考察を行う。続いて2章では、経営学以外の分野、特に文学、心理学における既存の物語研究についての理論的考察を行い、組織的知識創造理論との関連性について検討する。3章では、心理学をはじめとして近年さまざまな学問領域で関心が高まっている質的研究手法について考察する。特に、医療・介護社会学の領域で開発されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967）を再構築した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下, 1999, 2003）について取り上げ、その可能性について詳細な考察を行う。4章では、前章までに行った考察をベースとして、組織的知識創造研究を行うための新たな科学的研究方法を提案する。5章では、結論として提示した研究方法論の課題と今後目指すべき方向性を示す。

## 1. 経営学（組織論）における物語研究

本章では、経営学、特に組織論における物語研究の動向と、知識創造理論との関係について記述する。

### 1.1. 組織論における物語研究の動向

経営学における物語研究は、主に組織論（organization theory）の分野において行われている。物語は、英語で書かれ

た文献では”storytelling”—または単に”story”—、もしくは”narrative”と表現される。Boje（2001）は、”narrative”と”story”の違いについて、”narrative”は一貫性と同時に時系列を持った“筋（plot）”を持つが、”story”は単に事件やイベントを記したもので、“筋”を持たないものだと述べている。但し、Boje（2001）によれば、”story”と”narrative”はかなりの程度混同して使われている概念のようである（例えば Czarniawska, 1997）。従って、“物語”を英語でどう表現するかは研究者の判断が必要になるが、日本語で“物語”と表現されている場合は、Boje（2001）の定義に従って、“筋”によって時系列的に、一貫性をもってイベントが連なった形式で提示されたテキスト、ないしはメッセージと考えればよいだろう。

組織論における物語研究とは、別の表現で言えば“物語アプローチにもとづく研究”、もしくは単に“物語分析研究”と言い換えることができる。それに伴い、質的研究手法の1つとしての性格を持つ物語分析手法が、組織論の領域でも開発されている。例えば Boje（2001）は分析単位として”antenarrative”という概念（ante は“前の”を意味する接頭語でもあり、ギャンブルなどの“掛け金”でもある）を提唱している。”antenarrative”の特徴は、断片化され、構造的ではなく、“多音声的”（polyphonic）に表現されたテキストであることで、多元的な価値観が混在し、複雑な形態をとっている組織の分析を行うのに適しているという（Boje, 2001）。このように彼の分析手法はポス

トモダンのパラダイムに依拠しているが、この研究パラダイムの詳細な検討は3章(質的研究手法)に譲る。

組織論における物語分析は、一般的にはケース・スタディ(事例研究)に見られる。ケース・スタディとは、ある特定の組織(企業)の事例、もしくは事例間比較をもとに記述的分析を行い、優れた組織モデルを探求する研究手法であるが、ケース・スタディは定量的なデータを統計的に処理するというよりはむしろ、インタビューを通じて収集したテキストの内容分析を行うことで知見を導出する手法である。

組織論における物語アプローチ(narrative approach)について体系的な文献レビューを行った Rhodes & Brown (2005)によれば、組織論におけるそれは1970年代に始まり、1980、90年代には組織文化や組織シンボリズムへの着目から社会構成主義の理論的枠組みの発展を経て、現在では多面的に展開されているという。また、組織論研究で使用される narrative に関連のある概念として、story, fantasy, saga, myth, learning, strategic individuality, the exercise of power and control, sense-making, culture formation, collective centring, community mediation, IT implication, policy decisions of academic journals 等、多数あるという(Rhodes & Brown, 2005, p.170)。そのことから、組織論における物語アプローチのヴァリエーションの豊富さの一端が伺える。

## 1.2.組織論における物語分析研究と知識創造理論との関連性

Rhodes & Brown (2005)は、組織論における物語アプローチについて5つの研究テーマに分類している。具体的には、1) sensemaking (例えば Boje, 1995; Brannen, 2004; du Toit, 2003; Taylor, 1999; Weick, 1995)、2) communication (例えば Boje, 1991a, 1991b, 1995)、3) learning/change、4) politics and power (例えば Morgan & Dennehy, 1997)、5) identity and identification (例えば Simmons, 2001; Langer & Thorup, 2006)である。

一方、Boje (2006)は、主に一般向けビジネス書の物語文献が依拠している研究テーマとして、下記の4つを挙げている。1) story leadership、2) story training、3) story consulting、4) storytelling organization systemic。これらの分類はより現場サイドのニーズにもとづく見方であるため Rhodes & Brown (2005)の分類とやや趣が異なるが、本質的な差異はない。

このうち、野中等による組織的知識創造理論と密接に関連性があるのは、3) learning/change の領域である。learning/change 領域はさらに下記の3つに分類することができる。3-1) learning organizations (組織学習論、例えば Gold, 1997)、3-2) knowledge management (ナレッジ・マネジメント論、例えば Denning, 2001, 2004(a), 2004(b), 2005(a), 2005(b), 2006; du Toit, 2003; Kupers, 2005; Linde, 2001; Milne & Chllahan, 2006; Srinivasan, 2004)、

3-3) organizational change / development (組織変革論、例えば Barry, 1997; Boje, 2000; Boje & Rosile, 2003; Bryant & Cox, 2004; Collins & Rainwater, 2005; Langer & Thorup, 2006; Taylor, 1999)。このうち、3-1) の“組織学習論”と 3-2) の“ナレッジ・マネジメント論”は多くの点で重なりがある。ただ、組織学習論においては、ナレッジ・マネジメント論の展開はその一部に過ぎないと見なしているが、一方でナレッジ・マネジメント論においては、当理論は組織学習論の発展概念である (Nonaka & Takeuchi, 1995 : 訳 pp.63-66) として位置付けており、両者のスタンスは微妙に異なっている。また、ナレッジ・マネジメント論においては、基本的に言語表現である物語と、身体的な知識を伴う暗黙知とを結びつける試みが行われている点で特徴的である (例えば Kupers, 2005; Linde, 2001)。最後に、3-3) の“組織変革論”では、change と development はほぼ同じ意味で使われている。ただし、最近の傾向としては change を用いることが多いようである。ナレッジ・マネジメント論との関連性でいえば、両者ともに組織変革のために活用される物語を知識伝達のためのツールと捉えているものの、ナレッジ・マネジメント論はさらに踏み込んで知識を物語に転換して蓄積することの効果にまで研究の範囲が及んでいることが特徴的である (例えば Denning, 2001; Parkin, 2004)。

組織的知識創造理論は、上記の learning / change 内の 3 つのアプローチが密接にかかわり合うとともに、それら

の統合を志向したものと捉えることができる。組織的知識創造理論の地平は、一般的なナレッジ・マネジメント論のみに依拠しているわけではない。組織的知識創造理論の鍵概念の 1 つである知識のスパイラル・アップのプロセスの側面に光を当てれば、それはすぐさま組織変革論に結びつく。一方で、知識創造を支える組織行動を検討する場合に組織学習論は欠かせないであろう。

### 1.3.まとめ

本章では、文献レビューにより、組織的知識創造理論の土台となっている組織論の分野において、物語 (narrative) アプローチが、ポストモダン研究パラダイムに依拠し、多元的価値観が混在し複雑化した組織内現象を解明するために用いられていることを明らかにした。そのアプローチが用いられている研究テーマの 1 つとして learning/change 領域があるが、それはさらに組織学習論、ナレッジ・マネジメント論、組織変革論の各論に細分化される。これら 3 つの分野を横断した理論的アプローチが知識創造研究には必要である。また、組織的知識創造理論では暗黙知と形式知の転換モードとして、“共同化”、“表出化”、“連結化”、“内面化”の 4 つが定義されているが、物語アプローチは言語化に直結する“表出化”にのみ焦点を当てているわけではなく、言葉にならない暗黙知の存在をも考慮していることも明らかにした。組織論が依拠する物語アプローチ、については質的研究の理解が欠かせないが、それについては 3 章で詳細に考察する。

## 2.経営学以外の物語研究

本章では、経営学以外の分野、特に文学と心理学において行われている物語研究の動向を記述するとともに、それらの研究と組織的知識創造理論との関係性についての考察を記述する。

### 2.1.文学・心理学における物語を対象とした研究の動向

前章で検討した経営学における物語研究は、物語分析研究とほぼ同義であった。それに対し、経営学以外の領域では、物語分析手法に加えて、「物語それ自体」を対象とした研究も行われている。前者については質的研究手法として3章にて取り扱うこととし、本章では後者に着目する。

物語それ自体を対象とした研究は、主に文学の領域で行われている。そのうち、日本古典文学を専門としている藤井（2004）による物語の定義は、「人間的な言語行動のうちで他者をかかえこんで成立する在り方を示す叙述のすべて」（p. i）である。その上で、藤井（2004）は下記のように、物語の本質と、文学をはじめとした様々な領域での物語の取り扱い方を明解に述べている。

物語は、無数の物語文の集合であるとともに、構造、全体、あるいは部分というかたちをとって、単なる集合以上の凝縮力により、まとまろうとする。だから文や文章という視野から微細に分けられることができるとともに、構造や全体、あるいは部分像の迫力で、受け手に接近してくることをつ

よく感じさせられる。“人間にとってなぜ物語は必要不可欠”といった、雄大な規模の問いかけがわれわれを駆りたててやまない。

実際、身近ないたるところに、物語があふれかえっている。新しいタイプの言語学や、あるいは論理学は、談話という活動のほかにも、物語文というほかはない言語の在り方を見いだす。心理医療に携わるひとは、語り手が自己を語る語りの在り方のなかに他人を発見するプロセスを重視する。歴史哲学は、歴史を叙述したり、記述的に分析したりという行為自体が、きわめて人間くさいしかたで物語を作りだしているのではないかということに、否応なく気づかされる。

政治あるいは社会学者、宗教学者、それから教育の現場の担い手たちも、現代という複雑な世界がこんがらがってよく見えなくなっていったとき、「物語」という装置を一旦、視野に置いてみて、解明の糸口をつかんだ、という体験がすくなくなかったことだろう。思想史学者は史上のじつに多くの思想家たちが、対話形式や、物語叙述をとおしておのれの思念を語るさまにおどろく。

そしてさいごに、文学そのものが、小説と言ひ、詩と言ひ、物語という叙述を多量にかかえ、あるいは自身が物語そのものであるとし、さらには物語という呼称を身にまとって、日本古典で言う『源氏物語』『今昔物語集』『和泉式部物語』（＝『和泉式部日記』の別名）など、世にいっぱい行われている。文芸批評や時評は用語としての「物語」をぬきにして考えられない情勢にますますなってきた。（pp. ii・iii）

藤井（2004）はさらに、物語が“ものがたり”と“かたりごと”の二元構造から成るとの仮説のもとに説明を試みている。まず、日本語での“ものがたり”が古来どのような意味で使われていたかについて、

源氏物語の一節である「忍びやかに、心にくき限りの女房、四、五人さぶらはせ給ひて、御物語りせさせたまふなりけり」（桐壺、一一一五頁）を引用し、「しみじみと語りあう場面にこそ（ものがたりの表現が）ふさわしいと言えよう。「かたり」という語に「もの」を冠して、話題のとりとめなさをそこにこめている」（p.5）と述べている。一方で、もうひとつの概念として“かたりごと”の意味にも言及し、「便ち語りて日はく、汝を悲しき故に来つる。答へて日はく、<sup>うぢ</sup>族や、吾を<sup>なみ</sup>勿看ましそ。」（神代記・上、五段、一書第十）を引用し、「単なる説明ではなく、熱心に説得すること、問いかけることを多く意味する」（p.9）と述べている。続けて“かたり”の語源を、“ふること（古事、古語、旧事、旧辞）”、さらには“こと（言、事、語）”、“ことのもと（言本、縁、縁起）”、“もと”にまで遡ることで、とりとめもない談話を表わす“ものがたり”と起源説話を表わす“ふること”の対立関係が内包され、ゆたかな内容の語であると考察している。

藤井（2004）の物語の定義と前章で述べた Boje（2001）の”narrative”の定義を対比すると、“antenarrative”が“ものがたり”、“narrative”が“かたりごと”に概ね対応するが、Boje（2001）が両者を ante-post（前後）的な関係として捉えているのに対し、藤井は対立的な関係として捉えている点に違いがある。さらに、“かたりごと”の部分について、“問いかけること”についての意味を Boje（2001）は付与していない。問いかけること、の観点は、ネイティブ・アメリカンのイロコイ族に伝

わる口承の物語にも同様に見られるという点でも興味深い。Underwood（1994）によれば、イロコイ族に伝わる学びの物語は歴史的な事実にもとづいているが、学び手が今置かれた状況に応じて適切な問いかけがなされるような仕掛けがあるという。

一方、河合（1993）は臨床心理学（ユング学派）の立場から、物語を自（語り手）・他（聞き手）の関係をつなげるものという視点で下記のように述べているが、この視点についても経営学では積極的に取り上げているとは言えない。

ストーリーというのは筋をもっています。（中略）筋というのはどういうことかという、ユング派の分析家のジェイムズ・ヒルマンがおもしろいことを言っています。（中略）たとえば「六歳の子どもが死にました。そしてその後五日たって母親が死にました」と言うのと、ただ子どもが死んだ、五日後に母親が死んだ、という事実が並んでいるだけです。ところが「六歳の子どもが死にました。そして五日後、悲しみのあまり母親が死にました」と言ったら、つながってくる。それが筋だということです。だから、事実と事実のあいだをつなぐものが出てきて、“ああ、心配のあまりなんだな”ともっていくのがプロットというものだと考えるのです。

（中略）「私」が語るとなると、自分で筋をつけているということ自体、私という人間が入っているのです。私の考え、私の感じ、私の思想、そういうものが入るから筋がついてくる。それは単に事実を記述しているのとはちがうと思います。「語り」の場合は、「私」がそこに組み込まれてきているということがだいじではないかと思っています。（中略）その「語り」が内的体験の「語



り」を外れた場合に、聞く側はシラけるということがあります。シラけてしまうというのは関係が切れてしまうことです。つまり「語り」が生きているあいだは、話者と聞き手のあいだに関係があるわけです。(pp.8-11)

## 2.2. 物語それ自体を対象とした研究と組織的知識創造理論との関連性

前節から、経営学における研究ではあまり着目されていない物語の意味として、1) 問いかけ(例外として Parkin, 2004 の Reflections/Trigger として用意された質問シートがある) 2) 自他の関係性をつなぐもの、があると言えよう。これらの意味を物語の機能に積極的に付与することは、野中等の組織的知識創造研究において重要な意味を持つ。組織的知識創造理論では、知識を共有する(共同化)と

いう点で、他者との関係性が前提となっている。自他の関係性が切れてしまっただけでは知識共有はなされない。さらに、問いかけは、組織的知識創造理論においては最も重要なコミュニケーション・ツールであるとされている(例えばソクラテス・メソッドやトヨタの“Why?を5回繰り返す”方式)。さらに、知識創造理論の時系列でのスパイラル・アップ構造に着目するならば、心理学で発展したライフストーリー/ヒストリー研究、ライフサイクル研究(レビューについてはやまだ(2000)が詳しい)や物語構造研究(例えば Campbell, 1949; Propp, 1928; Voglar, 2000)から得られる示唆は大きい(表 2.1 参照)。

表 2.1.物語構造、ライフストーリー/ヒストリー、知識創造プロセスの対応

\*1: Voglar (2000, 訳 41, 379-380) による引用、\*2: 筆者による追加

Voglar (2000) ハリウッド 映画構成*1	Voglar (2000) 主人公の 旅の過程*1	Voglar (2000) 主人公の成長 の過程*1	Chambell (1949) 英雄の冒険*1	Propp (1928) 昔話形態 やまだ (2000) による再分類*2	Nonaka & Takeuchi (1995) 知識創造 プロセス*2
第一幕 出立・離別 ヒーロー の 決断	日常の世 界	問題の偏狭な 認識	出立	苦難	共同化
	冒険への 誘い	問題の認識の 深化	冒険への召命		
	冒険への 拒絶	変化への 拒否	召命の辞退	危機	表出化
	賢者との 出会い	変化への 躊躇	超自然的なるものの 援助		
	関門突破	変化への 第一歩	最初の境界の 越境 鯨の胎内		
第二幕 試練・通過 儀礼 ヒーロー の 行動	試練、仲 間、敵対者	最初の変化へ の挑戦	試練の道	転機	連結化
	最も危険な場 所への接近	大きな変化へ の準備			
	最大の試練	大きな変化へ の努力	女神との遭遇	エピファニー (聖なるものの 顕現)	
			誘惑者としての 女性		
			父親との一体化		
神格化					
報酬 (宝の獲得)	努力の成果 (進歩と後退)	終局の恩恵			
第三幕 帰還 行動の 結果	帰路	変化への 再挑戦	帰還の拒絶	変身	内面化
			呪的逃走		
			外界からの救出		
			帰路境界の越境		
	復活	大きな変化へ の最後の努力	二つの世界の導師	生き残り	
宝を持つての 帰還	問題の最終的 な解決	生きる自由	克服		

一方、文学や心理学における物語を対象とした研究と組織的知識創造研究の前提の違いとして、次の2つが考えられる。

1) 研究対象となる主体の質的相違、2) サイクルとして一巡する時間感覚の長さ。

1) 研究対象の相違については、文学や心理学の対象とする主体は個人であり、一方で経営学の主体は組織である。

Nonaka & Takeuchi (1995) のいう“知識創造”とはあくまでも組織的に行われる発展的変化の現象を対象としているのである。一方、心理学でのライフストーリー/ヒストリー、及びライフサイクル研究は個人を対象とした心理の発展的変化を対象としている。同様に、文学における物語構造分析から導き出されるものも個人の成長物語である。しかしながら、対象が個人か組織か、という区分は決定的なものではなく、むしろ曖昧なものである。そもそも知識は組織に留まるのではなく、組織を介してその構成員たる個人に還元されていく。継続的な知識創造活動が概ね同じメンバーによって繰り返し行われると仮定すれば（終身雇用を前提とした日本企業による調査により当理論が生まれた事を考えればこの仮定は的外れなものではない）、組織的知識創造活動とそれに関わる個人の成長は密接な関わりを持つとみなすのが自然である。つまり、組織的知識創造理論の研究は個人を主体とした現象と組織を主体としたそれを同時に扱う必要があるであろう。そのことは、組織的知識創造研究の最近の動向として、“場”やネットワークの研究が盛んであること（例えば、

Nonaka & Toyama, 2003, 2005a; 野中・遠山, 2004, 2005b; Nonaka, Toyama, & Konno, 2000; 野中・遠山・紺野, 2004; Peltokorpi, Nonaka, & Kodama, 2007) と矛盾しない。組織的知識創造理論にとって、組織とは個人が主体的に構築した自他関係性のネットワークである“場”の一部であり、個人は“場”を活用して継続して知識を創造し、発展的な変化を遂げる。つまり、組織的知識創造プロセスそのものの枠組みについての理論研究を行うならば、個人を主体とした発展的変化を扱う必要があるだろう。一方組織は、独自の制度や文化を構築することで、知識創造を行いやすい“仕組み”、ないしは環境を提供する主体である。そこにマネジメントの概念が入ってくる。つまり、組織的知識創造理論においては、マネジメントとは個人を管理するのではなく、“仕組み”を創造し、管理することとして定義される。藤井 (2004) や河合 (1993) が述べている通り、物語は自他を結びつける働きをするから、物語は“仕組み”そのものである。これらの観点から、Denning (2001) の研究を、物語をマネジメントすることそれ自体に着目したもの、また、Kunda (1992) の研究を、物語をマネジメントする方法としての制度や文化に着目したものとして捉える事ができる。

一方、2) 時間の長さについては、文学・心理学において扱う時間は知識創造理論に比べてかなり長いと言ってよい。前者は短くて数年、ないしは人間の一生かかってようやく一巡するという前提である。

それに対して後者は、主に企業における研究や開発行為を対象にしていることから、長くて数年、短ければ数か月の単位で一巡する。時間的な長さは変化の質に大きく依存することから、1)の主体の違いよりもずっと大きなものであると考えられる。しかしながら、この違いは、組織的知識創造理論においてスパイラル・アップがまだ構造化されていないということを示すものであり、新たな研究の可能性を示唆するものである。つまり、現行の組織的知識創造理論では、一連のモードの遷移によってどのような変化が起きるかは説明できても、二巡目、また次の三巡目のプロセスが行われると、直前のプロセスとそれぞれのモードの活動の中身がどう変わってくるのかを説明することができないのである。そのような問いに答えるためのヒントとすることに、文学・心理学で蓄積された研究成果を積極的に活用する意義がある。

### 2.3.まとめ

本章では、経営学以外の物語研究、特に文学、心理学における研究をレビューし、それらの研究成果を組織的知識創造研究に適用することの有効性について論じた。物語の持つ“問いかけ”と“自他の結びつけ”としての機能に積極的な意味を見いだすこと、また、発達心理学におけるライフサイクル研究や物語構造研究にもとづく長いスパンでのプロセスによってもたらされる変化を積極的に組織的知識創造理論の枠組みに取り込んでいくことが必要である。

## 3.質的研究手法

本章では、質的研究手法に焦点を当て、既存研究のレビュー結果を記述する。

### 3.1.質的研究の動向

1章において、経営学における物語分析手法を理解するためには、質的研究手法が欠かせないと既に述べておいた。それを受けて本章では質的研究について詳細な検討を行う。

質的研究は、臨床心理学（例えば河合, 1993）や現場（フィールド）心理学（例えば能智（編）, 2006; やまだ, 2000）、医学（例えば Greenhalgh & Hurwitz, 1998; 斎藤・岸本, 2003）、介護・保健学（例えば小倉, 2005）、人類学で用いられることが多い。しかも、それぞれが独自に発展しており、手続きが分野間に跨って標準化されているわけではない。しかも、その手続きが依拠すべき固有の理論や存在論、認識論、方法論、研究の評価から構成される研究パラダイムも多様である（Denzin & Lincoln eds, 2000）。表 3.1 は、代表する 5 つの研究パラダイム（実証主義（positivism）、ポスト実証主義（postpositivism）、批判理論（critical theory）、構成主義（constructivism）、参加型（participatory））についての比較表である。

表 3.1. 研究パラダイムの基本的信念・立場  
(Denzin & Guba (Denzin & Lincoln (eds)), 2000: 訳 〈1 巻〉 p.148-149 をもとに  
筆者一部修正)

	実証主義	ポスト実証主義	批判理論その他	構成主義	参加型
存在論	素朴なリアリズム 「リアルな」現実、しかしそれを把握し理解し得る	批判的リアリズム 「リアルな」現実、しかし不完全にしか、そして、確率的にしか把握し理解できない	歴史的リアリズム 実際の現実社会的、政治的、文化的、経済的、民族的、ジェンダー的な価値によって形成される；時間を追って結晶化する	相対主義 地域的にそして具体的に構築された現実	参加的現実 主観的－客観的現実、心と所与の宇宙の共同によってつくられた現実
認識論	二元論/客観主義；発見物は真	修正的二元論/客観主義；批判的伝統/コミュニティ；発見物はおそらく真	相互作用的主観主義；価値媒介的発見	相互作用的主観主義/ つくり上げられた発見	宇宙との参加的相互作用における批判的主観性；経験的、命題的、実践的理解についての認識論の拡張；共同構築による発見
方法論	実験的/操作的；仮説の検証；主として量的方法	修正的実験的/操作的；批判的多元論；仮説の反証可能性；質的方法を含むこともある	対話的/弁証法的	解釈学的/ 弁証法的	共同的探究への政治的参加；実践的なものの重視；共有された経験的文脈に基礎づけられた言語使用
研究の評価	内的・外的妥当性、信頼性、客観性		歴史的状況依存性；無知と誤解の解消；行動の刺激	信頼性と信憑性	経験的、表象的、命題的、実践的理解の一致；人間が繁栄するように世界を変革しようとする行動が生み出される

このうち、“ポストモダン”と呼ばれる研究パラダイムは、批判理論（その他）、構成主義、参加型の3つである。ポストモダン・パラダイムと実証主義・ポスト実証主義の関係性について誤解を恐れずに説明するならば、後者が真実は99.9%仮説であるとする立場を取る一方、前者は、真実は100%仮説であるとする立場を取る、という違いがあるであろう。また、ポストモダン・パラダイムにおいても、その相対性をどの視点で捉えるかによって微妙に立場が変わってくる。批判理論は、“真実は時間とともに変化する”との立場で、マルキシズムの影響を受けている。一方構成主義は時間よりはむしろ場所、状況（コンテキスト）によって真実が変化する、との立場である。参加型になるとさらにラディカルになり、同じ場所、コンテキストであってもその場に参画する度合いによって真実が変わってくる、との立場をとっている。参加型パラダイムは、アクション・リサーチ（現場介入型研究）手法を引き起こすことから、それ以外の4つのパラダイムが持つ現場への介入をむしろ恐れる立場での研究手法とは一線を画しているといっていよい。

下記は、Denzin & Lincoln（eds, 2000）による質的研究の定義とその特徴である。質的研究が状況（context）依存的であり、かつ多様性を持つ方法論であることが明確に示されている（下線は吉永により追記）。

質的研究とは観察者を世界の中に位置づける状況依存的な活動である、という定義である。質

的研究は、世界を可視化する解釈的で自然構成的な一連の実践からなる。こうした実践によって世界は変えられる。つまり、実践によって、世界は、フィールドノート（field notes）、インタビュー、会話、写真、記録、メモなどの、自己による一連の表象に変換される。（中略）質的研究では、諸個人の生活における日常的ないしは問題的な場面や意味を示す多様な経験的資料—事例研究、個人経験、内省、ライフ・ストーリー、インタビュー、作品、人工物、文化作品や文化産物、観察資料、史料、相互行為に関する資料、視覚資料などが意図的に収集され活用される。したがって質的研究者は、当面する主題をより良く理解したいと常に念じて、実にさまざまな解釈実践を展開する。しかし当然ながら、それぞれの実践ごとに世界は異なった仕方でも可視化される。それゆえ、どんな研究においても、複数の解釈実践が用いられることが頻繁にあるのである。（訳〈1巻〉3）

質的研究とは、学際的で学問横断的な、そして、時には抗学問的なフィールドである。それは人文科学、社会科学、そして自然科学間を横断する。質的研究は同時に多方向性をもつ。それゆえ多元的なパラダイム志向となる。質的研究の実践者はマルチメソッド・アプローチの価値にも敏感である。彼らは、自然主義的パースペクティブと人間経験の解釈的理解に関与している。同時に、質的研究のフィールドは元来、政治的であり、多様な倫理的・政治的立場によって形成されている。

質的研究は、同時に2つの緊張を併せもっている。つまり、解釈的、脱実験的、ポストモダンの、フェミニズム的、批判的な幅広い感性に敏感であると同時に、人間経験とその分析に関する、実証主義的・ポスト実証主義的、ヒューマニティックで自然主義的な限定的概念にも敏感である。さらに、こうした緊張は、同一の研究においても、ポストモダンと自然主義の両方、あるいは批判理

論とヒューマニズムのパーспекティブの両方を、併せもつことがある。(訳〈1巻〉p.8)

上記の特徴から、基本的には質的研究はポストモダン・パラダイムにもとづく研究アプローチを主にしつつも、同時に実証主義・ポスト実証主義的なアプローチを取る柔軟性も志向していることが見て取れる。このことは、質的研究が本質的に学際的なアプローチと親和性が高いことと無関係ではない。学際的なアプローチは、方法論 (discipline) が定まっていなことが特徴的で、研究者は“時と場合に応じて適切な方法論を選択する”ことを求められるからである (佐藤, 2002)。

### 3.2. 質的研究と量的研究の違い

Denzin & Lincoln (eds, 2000) は、量的研究との比較を通じて浮かび上がってくる、質的研究スタイルの 5 つの特徴について下記のように述べている (下線は吉永が追記)。

「質的」という用語は、数、量、強度、頻度などによっては実験的に検証や測定はできない、モノの質や過程あるいは意味を重視している。質的研究者は (中略) 社会経験がどのようにつくられ意味づけられるかに重点を置いた問いに答えようとする。これとは対照的に、量的研究は、過程ではなく変数間の因果関係の測定と分析に重点をおいている。

#### 1) 実証主義とポスト実証主義の用いられ方

ポスト実証主義の伝統にくみする質的研究者の多くは、大規模な母集団内に被験者グループを位置づける手段として、統計尺度や統計手法や統計書を用いることはあるけれども、量的研究者の

使う複雑な尺度や手法 (パス解析、回帰分析、ログリニア分析) を利用して知見を報告することは滅多にない。計測や数量化は、ある種のデータに基づいた解釈や仮説を広げたり補強したりするために用いられる手続きにすぎない。両者はそのことを知った上で使われるべきである。それらはある種の安全装置として、早計にあるいは無条件に用いるのは避けるべきである。

#### 2) ポストモダンの感性の受け入れ

ポストモダンの思潮の学派に属する多くの人は、彼ら自身の研究業績が評価される際に、実証主義やポスト実証主義の基準が彼らの業績にとって関連がないと見なし、そのような基準は、ある種の科学、つまりあまりの多くの声 (voice) を沈黙させる科学を再生産するだけだ、と考えるからである。そこでこうした研究者たちは、彼らの研究業績を評価するために、迫真性、情緒性、個人の責任、思いやりの倫理性、政治的实践、多音的テキスト、対象者との対話などを含む、代替的な方法を求めている。

#### 3) 個人の見地の把握

質的研究者は、詳細なインタビューと観察を行なうことにより、行為者の見方へいっそう近づくことが可能である、と考えている。彼らは、量的研究者が現実からかけ離れた推論的な方法や資料を使っているために、対象者個人の見方をほとんどつかむことはできない、とも主張する。

#### 4) 日常生活の制約条件の検証

質的研究者は、社会的事象を行為の中で捉え、彼らの知見はそこに埋め込まれている、とみている。イーミックで、個性記述的で、事例本位の立場にくみしており、特定の事例の細目に注意が払われる。

#### 5) 厚い記述の保証

質的研究者は、社会的事象の豊かな記述にこそ値打ちがあると信じている。(中略) 質的研究者

は、エスノグラフィックな散文、歴史的な語り、一人称の説明、スチール写真、ライフ・ヒストリー、虚構的事実、自叙伝などを好んで利用する。量的研究者は、数学モデル、統計の図表を用い、通常は、非個人的で三人称的な散文で研究成果を記述する。(訳〈1巻〉pp.9-12)

上記から、質的研究が“個”、ないしは“単一事例”の“豊かな”記述的分析を重視していることが読み取れる。定量分析に欠かせない“平均”や“ばらつき（標準偏差、分散）”のデータにもとづく平均像を対象とした分析は質的研究では行われぬ。また、研究者の存在を分析から捨象するのではなく、むしろ調査の中心に置く場合が多い。質的研究においては、研究者自身が“分析ツール”であるとの立場を取る。分かりやすい例としては、通常の論文形式においては、結果（Results）と考察（Discussion）は明確に区分される。しかしながら、質的研究にとって、結果と

考察の分離は不可能であるし、無意味なものとなる。示された結果そのものにも研究者の思考の影響が入っているからである。

### 3.3.質的研究の戦略類型と分析手法類型

質的研究の戦略類型は、主に以下の9つである（Denzin & Loncoln, 2000: 訳〈2巻〉p.37-41）。1) パフォーマンス・エスノグラフィー、2) 事例研究、3) エスノグラフィーと参与観察、3) 解釈実践の分析、4) グラウンデッド・セオリー、5) ライフ・ヒストリー法、6) ニュー・ヒストリーと歴史的方法、7) 語り・研究方法・言説としての証言、8) 参加型アクション・リサーチ、9) 臨床モデル。また、図 3.1.では、質的分析手法の類型を、社会学的伝統（経営学や臨床・現場心理学も含まれる）と言語学伝統（文学や認知科学も含まれる）に分類して示す。



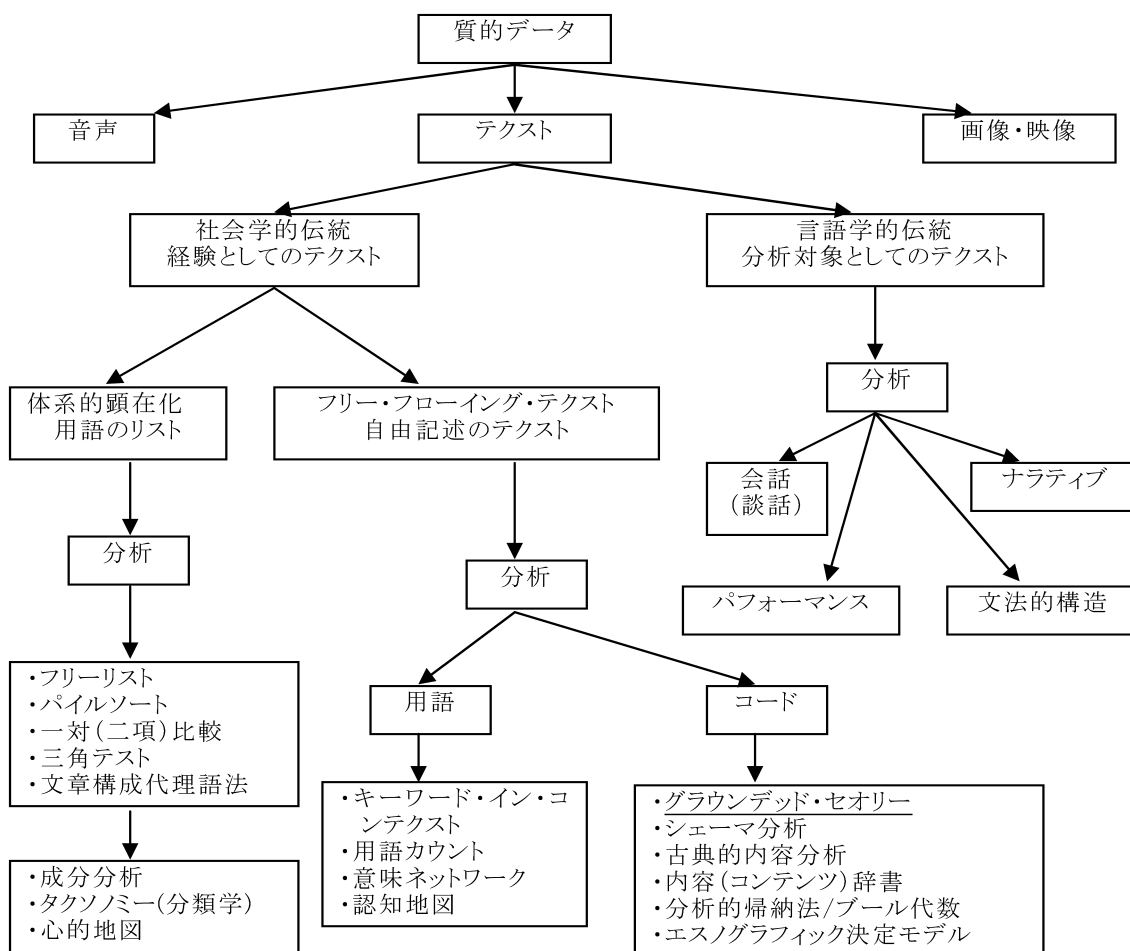


図 3.1.質的分析手法についての類型化

(Ryan & Bernard (Denzin & Lincoln (eds)), 2000: 訳 〈3 巻〉 p.166)

### 3.4.グラウンデッド・セオリー・アプローチ

前節で挙げた質的研究の戦略・分析手法のうち、本報告では、質的研究のスタンダードな手法になっているグラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach) を特に取り上げる。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、Glaser & Strauss (1967) が、量的研究 (Glaser) と質的研究 (Strauss) の融合を目指して、また、量的研究においてよく展開されるグラウンド・セオリー (誇大

理論) の実証研究というアプローチから、データに密着した (grounded)、帰納的な理論構築というアプローチへのシフトを目指して構築された分析手法である (グラウンデッド・セオリー・アプローチにもとづく研究成果については Glaser & Strauss, 1965 を参照のこと)。当手法は上記に加え、1) データ収集・分析作業が同時並行的に行われる、2) サンプリングの志向性が母集団との近似ではなく構築しようとする理論との近似である、の 2 点から質的研究アプローチが量的研究

アプローチを乗り越えようとする方向性にうまくマッチしている。また、分析のための手順が比較的明解に示された事で、訓練を積めば誰でも当手法を用いて一定の成果を出すことができるようになったことも、当手法が普及した大きな原因のひとつだと考えられる。さらに、グラウンデッド・セオリー・アプローチを支援するソフトウェア（Qualitative Data Analysis (QDA) software）も複数開発されている。佐藤（2006）は、代表的な3つのソフトウェアである MAXqda2、NVivo7、ATLAS.ti5 についての基本的な使い方について解説を行っている。佐藤（2006）によって、ようやく日本での質的研究者が本格的に分析ソフトウェアを使用する環境が整いつつあるといえよう。尚、筆者がそれぞれのソフトについて評価したところ、MAXqda2 が、直感的な操作感、軽快さにおいて群を抜いていた。現バージョンでは一部について日本語が使えないものの、さらに最新バージョンである MAXqda2007（2007年4月4日現在リリース済）では言語データフォーマットが Unicode に対応し、日本語がフルに活用できるようになった。

Charmaz (Denzin & Lincoln (eds), 2000) は、グラウンデッド・セオリーの学問的貢献を下記のように述べている。

グラウンデッド・セオリーは、「質的研究の革命」の先鋒を務めてきた。グレイザーとストラウスは、社会科学の歴史における批判的な見地から『データ対話型理論の発見』（1967）を著した。彼らは質的研究法を擁護し、量的研究が社会科学的研究における唯一の体系的な方法だという当時

優勢であった見方に対抗したのである。本質的に、グラウンデッド・セオリーの方法は、収集されたデータを説明できる中間範囲の理論枠組みを構築するためのデータ収集と、その分析に関する体系的で帰納法的なガイドラインから成り立っている。研究の全過程をとおしてグラウンデッド・セオリーの方法を用いる研究者は、データの分析的な解釈を展開しつつ、さらなるデータ収集を企図していく。このような試みによって、理論的な分析は深められ、洗練されていくのである。グレイザーとストラウスがグラウンデッド・セオリーの方法を開発して以来、質的研究者たちは、自身の研究を正当化するためにこの方法の使用を標榜してきた。」（訳〈2巻〉 p.169

一方で、グラウンデッド・セオリーにもとづく分析手法は、木下によれば、共同開発者である Glaser と Strauss の意見の対立の影響から、少なくとも4つのバージョンが存在する。従って、本アプローチ選択にあたってはそれぞれについて十分な検討が必要である（各バージョンの詳細なレビューは木下, 1999, 2003 が詳しい）。尚、日本で詳しく手順が紹介されているのは、Strauss & Corbin 版（Strauss & Corbin, 1998; 戈木, 2005, 2006）と修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下, 1999, 2001）の2つである。

まず、Strauss & Corbin 版（1998）にもとづくグラウンデッド・セオリーの分析手順についての、Charmaz (Denzin & Lincoln (eds), 2000) の説明を下記に引用する（下線は吉永追記）。

### 1) コード生成

データ収集の過程で、生成しつつあるデータをコード化していく。コード化をとおして、収集したデータの意味を特定化し分類することを始める。(中略) コード化は、経験的資料に対して、新たな視座を獲得する助けとなるし、さらなるデータ収集に焦点を合わせることに役立つ。それまでには見えてこなかった方向へと私たちを導いてくれることもある。量的研究とは違って、データをあらかじめ想定され標準化されたコードに当てはめるのではなく、研究者によるデータ解釈をとおして、(中略) コードを形成していくのである。(中略) 行ごとのコード化により、データに向けて問いを発し、後のデータ収集のあいだに焦点を合わせるべきデータ中の齟齬や手がかりを正確に指摘することができるようになる。(訳〈2巻〉p.176)

### 2) 継続的比較法によるコードの加減・整理、カテゴリーとして体系化

行為に関するコードの生成によって、グラウンデッド・セオリーの主要な手法である比較法の利用が促される。グラウンデッド・セオリーにおける継続的比較法では、以下のような比較がなされる。①異なる人々の比較(例えば彼らの見解、状況、行為、説明、経験)、②同一人物から異なる時間軸において得られたデータの比較、③事件と事件との比較、④データとカテゴリーとの比較、⑤カテゴリーと他のカテゴリーとの比較である。

(中略) ストラウスとコービン(1998)は、次元化、軸足コーディング、条件マトリックスという新しい手続きを導入している。(略) シャッツマンは、ある特性や現象が、1つ以上の意味をもつような複雑さを認識し説明するために、早くから次元性という概念を開発している。ストラウスとコービンは、このシャッツマンの意見に基づきながら、特性を連続体をなす諸次元へと分割する

というアイデアを提起したのである。これをふまえば、カテゴリーの特性にかかわる「次元分析表」を作成することができる。ストラウスとコービンはさらに、「軸足コーディング」と呼ばれる、(略)カテゴリーとそのサブカテゴリーを関係づけることを目的としている。サブカテゴリーには、カテゴリーを導き出す諸条件、カテゴリーの文脈、カテゴリーが取り扱われることをとおした社会的相互行為、そうしたことの帰結といったものが含まれる。(訳〈2巻〉p.177)

### 3) 理論的メモの作成

メモ取り(コード化と分析完了後の第一草稿の中間作業)は、更なるデータ収集—より初期にはコード化のための、より後には理論的サンプリングのための一手がかりを明確化することを支援する。(略)メモ取りの効用は、分析的解釈と経験的現実とのつながりを維持させることにある。そうしたつながりを意識しながら、それを直接検討するために、生データをメモの中に取り込んでおく必要がある。異なる情報源からの生データによって、正確な比較、アイデアの刷新、カテゴリーの特性の分析、パターンの発見といったことが可能になるのである。(訳〈2巻〉p.178)

### 4) 理論的飽和という基準にもとづくサンプル収集

グラウンデッド・セオリーの方法を用いる研究者が、みずからのカテゴリーを洗練させ、理論的な構成物として発展させようとするとき、しばしばデータや理論の不十分さに気付くことがある。そこで、フィールドに戻り、それらの概念上の不十分さを補うために、データを限定的に収集しようとする。これが、理論的サンプリングである。(訳〈2巻〉p.181)

グラウンデッド・セオリーの方法を用いる研究者は、研究を終結させる上で、通常、カテゴリーの「飽和」(すなわち、どんなデータもすでに生

み出されたカテゴリーに適合するという事態) という基準を採用する。(訳〈2巻〉p.182)

次に、木下(1999, 2003)による独自の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を紹介する。木下(1999)によれば、量的研究者のGlaserと質的研究者のStraussに埋め難い考え方の相違が発生し、かつStraussが死去してしまったため、彼らに代わってグラウンデッド・セオリー・アプローチの再統合を試みたという。M-GTAの特徴は、一言で言えばGlaser & Strauss(1967)の原点回帰であり、分析手順をシンプルにしたことである。M-GTAの主要特性として、木下は下記の7項目を挙げている(木下, 2003, p.44-45、下線は筆者が追記)。さらに、M-GTAの分析の進め方を図3-2で示す。

1) 以下のグラウンデッドセオリーの理論特性5項目と内容特性4項目を満たすこと。

1-1) 理論特性5項目(p.25-29)

- A. データに密着した分析から独自の説明概念をつくって、それらによって統合的に構成された説明力にすぐれた理論であること。
- B. 継続的比較分析法による質的データを用いた研究で生成された理論であること。
- C. 人間と人間の直接的なやりとり、すなわち社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に有効であって、同時に、研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内における説明力にすぐれた理論であること。
- D. 人間の行動、なかんずく他者との相互作用の変化を説明できる、いわば動的説明理

論であること。

- E. 実践的活用を促す理論であること。理論内容のどの部分に働きかければ相手の行動がどう変化するか予想できるので、ヒューマン・サービス領域での実践的な活用に耐える。ここにおいて、【研究する人間】とは別のもう1人の人間が登場する。【応用者】である。

1-2) 内容特性4項目(p.30-32)

- F. 現実との適合性(fitness)
- G. 理解しやすさ(understanding)
- H. 一般性(generality)
- I. コントロール(control)

2) データの切片化をしない。それに代わるデータの分析方法を、独自のコーディング方法と【研究する人間】の視点を組み合わせる(吉永中:4)の“概念”を分析の最小単位にすることにつながる)

3) データの範囲、分析テーマの設定、理論的飽和化の判断において方法論的限定を行うことで、分析過程を制御する。

4) データに密着した(grounded on data)分析をするためのコーディング方法を独自に開発した。概念を分析の最小単位とし、グレーザーの特性である作業としての厳密なコーディングとストラウスの特性である深い解釈を同時成立させるために、分析ワークシート(筆者注:概念名、概念定義、ヴァリエーション(生データからの引用箇所)、理論的メモから構成される)を作成して分析を進める。

5) 【研究する人間】の視点を重視する。

6) 面接型調査に有効に活用できる。

7) 解釈の多重的同时並行性を特徴とする。分析作業を段階分けせずに、例えば、データの解釈から概念を生成するときに、類似例や対極例を検討するだけでなく、同時に、その概念と関係するで

あろう未生成の他の概念をも検討する。推測的、  
包括的思考の同時並行により理論的サンプリン

グと継続的比較分析を実行しやすくしている。

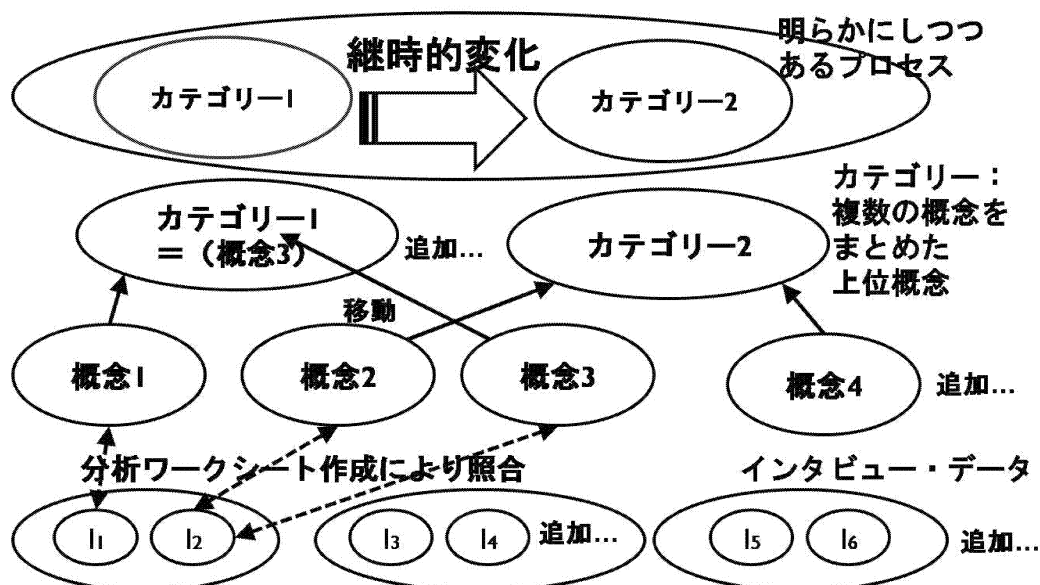


図 3.2.M-GTA の分析のまとめ方 (木下, 2003: 214 をもとに筆者一部修正)

上記 M-GTA の主要特性についてこれ以上の詳細な考察は避けるが、研究パラダイムの観点から言うと、ポストモダン的なアプローチになっていると考えられる。具体的には 5) の「研究する人間の視点を重視する」が示す通り構成主義的なパラダイムと言えるが、一方で、研究する(現象を解釈する)人間と実践する(理論を応用する)人間を明確に区分することで、参加型パラダイムを注意深く避けている(表 3.1.を参照)。

一方、近年グラウンデッド・セオリーそのものに対する批判が高まっている。能智(2006)は、コード化によってテキストをばらばらに切り刻んだ後でカテゴリー、ないしはカテゴリー間の関係を表わすプロセス・モデルによって統合するアプローチは、その質的研究の本来の定義である“状況依存型”の分析方針からは

ずれるのではないかと危惧する。代わりにデータそのものの時系列的な発展の構造そのものにも焦点を当てるべきだとし、言語学で開発、使用されてきたシーケンス(継起連鎖)分析(図 3.1.参照、例えば Wooffitt, 1992)を代替分析手法として下記の様に示している(下線は筆者が追記)。

シーケンス分析は、データをなるべく切り刻まずに、発話の流れや全体的な形(ゲシュタルト)を大事にしながら分析を進める点で共通する技法です。ここで言う「全体」とは、発せられた言葉のレベルにおける「全体」という意味のこともあれば、言葉が発せられた状況も含んだ、より広い「全体」が問われていることもあります。近年はわが国でもこうした方法を試みている研究者は決して少なくないように思われます。にもかかわらず、KJ 法やグラウンデッド・セオリー法ほ

どには技法や手続きの詳細が知られているわけではなく、質的研究の初学者にはなかなかとつきにくいというのが現状ではないかと思えます。

(中略)「全体やコンテキストを大事にする」と言われても、どこまでを「全体」とすればいいのか、どこまでが「コンテキスト」なのかが、最初からはっきり定義されているわけではありません。果ての見えないデータの拡がりを中心に、途方にくれてしまいます。さらに、広い範囲を分析の単位とすると、その見かけ上の形は多様に変化しますから、そこから共通の特徴を取り出しにくいということもあるでしょう。

分析のそのような困難に対処するために、シーケンス分析のなかで割とよく使われている会話分析や談話分析、ナラティブ分析などでは、比較的わかりやすい形の分析の手がかりを呈示しているように思えます。「隣接ペア」(会話における質問-答えなどペアになる構成要素)であるとか、「ポジショニング」(語りに登場する登場人物の間の位置関係)であるとかいった概念が、シーケンス的に与えられた言語データに適用される枠組としてよく知られた例です。(p.65-66)

上記のグラウンデッド・セオリー批判のうち、データの全体性に考慮することや、データの文脈(例えばポジショニング)を考慮した分析を行うことは重要であろう。筆者の今までの調査経験でも、インタビューによって考えが深化し(もしくは混乱し)、発言の中身が発展的に変化することは珍しくない。しかしながら、本当の意味での発展的変化を確認するためには、シーケンス分析でもまだ不十分である。真の意味での時系列的なプロセスを追うのであれば、ワンショットのインタビュー資料に依存するのではなく、

発達心理学で試みられている通り、半年毎、ないしは1年毎といった定点観測を数年単位で行う手法が真の意味で有効だと考えられる。もしそのようなデータを取ることができれば、かえってM-GTAにもとづく分析方法の有効性が高まると言える。なぜならば、“概念”に時間情報を付与することで、概念Aから概念Bへの発展的変化に対する妥当性を十分に確保することが可能になるからである。組織的知識創造理論との関連性で言えば、M-GTAは、人間の相互作用によって発展する現象のプロセスに最適である、という点でM-GTAを研究手法に用いる事は一考に値する。ただし、グラウンデッド・セオリーについての批判も加味しながら、他の手法と組み合わせたアプローチの再設計が必要となる。

### 3.5.まとめ

本章では、質的研究の全体像を示すとともに、その中でも特にグラウンデッド・セオリーを中心に考察した。その結果、M-GTAをコアとしたアプローチが組織的知識創造研究に有効である事が分かった。グラウンデッド・セオリー・アプローチをサポートするITツールは近年充実しており、解説書も多く出回っていることから、比較的容易に当アプローチを用いることが可能である。

### 4.組織的知識創造研究手法のデザイン

本章では、組織的知識創造研究を進めていく上での調査・分析方法について考察する。

#### 4.1.組織的知識創造研究の手法

前章までの議論で、1) 組織研究においては、多元的社会のもと複雑化した組織内現象を解明するために物語分析アプローチが有効であること、そしてその研究パラダイムはポストモダン・パラダイムに依拠していること、2) 物語を対象とした他の研究分野における成果を活用することで、組織的知識創造理論 (Nonaka & Takeuchi, 1995) の発展に寄与する仮説を構築することができること、3) ポストモダン・パラダイムにおいては、質的研究手法、特に M-GTA による研究アプローチが有効であること、4) M-GTA の限界を克服するために、4-1) 個の全体性、及び 4-2) 時系列での発展性に考慮する形で他のアプローチと組み合わせる必要があること、の4点が浮き彫りになった。下記にそれぞれについて詳細を述べる。

まず 1) の研究パラダイムについて述べる。3 章で議論した通り、ポストモダン・パラダイムに依拠するに当たっては、更に批判理論、構成主義、参加型のどのパラダイムに依拠するかを判断しなくてはならない。本研究手法については、M-GTA のスタンスとは異なり、構成主義パラダイムと参加型のパラダイムの中間を狙うこととする。その理由としては、筆者が参加型パラダイムに価値観を置いている信念上のものが大きい。但し、完全な参加型パラダイムでは、調査対象者との共同活動を通じて、調査対象先にかんがりのインパクトを与える介入を行う準備が必要である。具体例として、コンサ

ルタント主導による組織変革プログラムの推進がある。しかし、一研究者がそのような機会に恵まれるのは不可能ではないものの、政治的な判断が絡み（政治的な側面こそ参加型パラダイムが重視していることだが）大変難しい。しかしながら、調査を通じて、対象となる個々人との積極的な対話を行うことはできるし、そのことは調査対象に介入をしたと言えなくもない。Holstein & Gubrium (1995) が提唱するアクティブ・インタビューは調査者が積極的に調査対象者と“間主観的世界を築く”ことを目的とした手法であり、参加型パラダイムに近い。このような信念上の問題のほかにも、現実的な問題として、協力してもらい調査対象者のモチベーション確保という狙いもある。今までの調査経験から、調査対象者は、調査者との対話を通じて、今まで思いつきもしなかった考えや認識に気づくという期待が、“物語る”ことの大きなモチベーションの1つになることが分かっている。このことは、2 章で触れた河合 (1993) の物語の持つ機能（自他の関係を作る）と無関係ではない。

2) の既存の物語研究の活用については、組織的知識創造理論を基盤にしつつ、新しい観点からの仮説的なプロセス・モデルの構築を積極的に行っていく必要がある。物語の持つ“問いかけ”と“自他の結びつけ”としての機能に積極的な意味を見いだすこと、また、発達心理学におけるライフサイクル研究や物語構造研究にもとづく長いスパンでのプロセスによってもたらされる変化を積極的に組織的知識創造理論の枠組みに活かしていくことが

必要である。具体的には、知識変換モード間の遷移が行われる時に特徴的なコミュニケーション現象や組織的知識創造活動が一巡し、さらに新しい活動への引継ぎに伴うプロセスの質的变化について、新たな仮説が得られることが期待される。

3) 及び 4) の M-GTA を核とした新たな研究手法については、自らが所属する組織を調査するのではない限り、時間的な問題や秘密保持の観点、さらには受入れに絡む政治的な側面から参与観察をする機会は大いに限られる（これらの理由から、Kunda, 1992 の研究は大変貴重なものであると言える）。従って、参与観察データは補助的なものとして捉え、インタビューにもとづくデータ収集をメインに位置づけることが現実的である。従って、インタビュー調査での運用を想定した M-GTA は上記の状況にとって都合のよいものであろう。

#### 4.2. データ収集・分析手法

本論で提案する質的研究アプローチ（以下、組織的知識創造研究手法とする）は、主にデータ収集・分析手法に分かれるが、データ収集とデータ分析はリニアな関係とは捉えない。知識創造プロセス研究手法の全体構造は、佐藤（2002）の「漸次構造化法」に拠っている。漸次構造化法とは、大抵の場合単一事例を対象としたフィールドワーク活動（文化人類学的アプローチに準ずる）を基盤として、分析枠組みの構築、データ収集、およびデータ分析を同時並行的に行うことで新しい理論的枠組み（モデル）構築を目指すメタな研究手法である。漸次構造化法

は、既存研究を意識しながらも、その枠にとらわれることなく現実をありのままに、より深く理解するために重要な手法である。

加えて、本研究手法はポストモダン研究アプローチとしての性格を保持する。ポストモダン研究アプローチとは、Wilber（1998）に従えば、人間の心的経験にもとづく科学的アプローチであり、「対話的科学」とも表現される（訳 p.202）。その意味するところは、調査者と調査対象者との対話記録こそが直接に経験（ないし感受）されたデータに他ならない、ということである。対話記録は、ほとんどの場合インタビューの形式によって得られるものであるが、インフォーマルな形での雑談においても、それについて詳細なメモを取ることで代用することができる（日付、場所、対話者が明記されたメモの集合体が文化人類学で言うところのフィールド・ノーツである）。つまり、組織的知識創造プロセス研究手法で収集すべきデータとは、調査者と調査対象者 1 人ひとりとの対話記録であり、その結果得られたテキストが分析対象となる。

以上の前提をもとに、知識創造プロセス研究手法を提案する（図 4.1. 参照）。具体的には、下記の 4 つの方法の組み合わせによるデータ収集・分析手法である：1) 発達心理学で議論されている「個的縦断研究法」を用いた定点観測を志向したデータ収集方法、2) 「拡張的学習理論」（Engeström, 2001）の枠組みを活用した事例の発展プロセス分析に基づく時系列での組織活動分類方法、3) 社会心理



学者の内藤（1997/2002）によって開発された PAC 分析手法にもとづくインタビュー方法、4) M-GTA にもとづくイン

タビュー記録分析を通じた概念の生成と概念間の関係性を明確に記述したプロセス・モデルの構築方法。

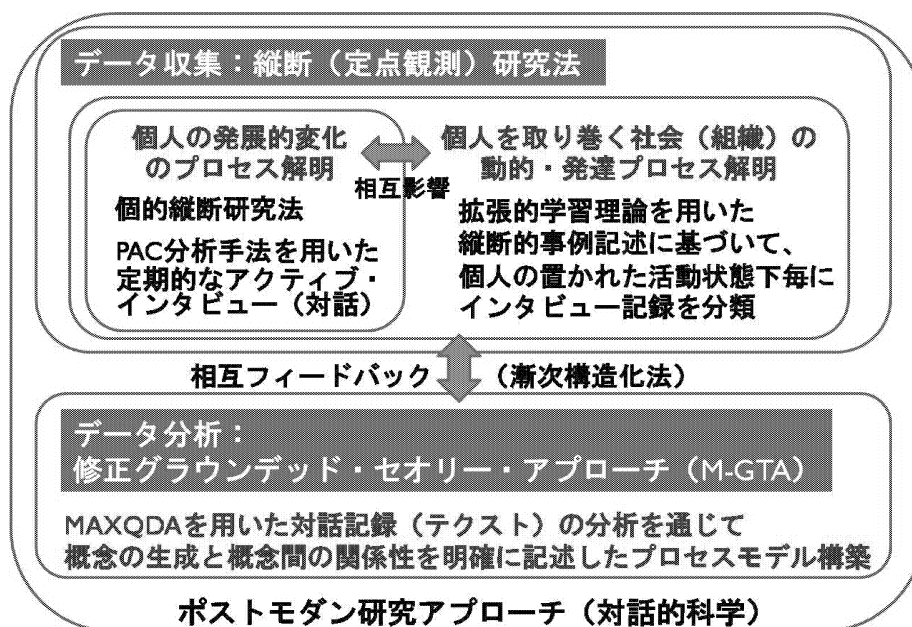


図 4.1.組織的知識創造研究手法の構造

#### 4.2.1.個別的縦断研究法

組織的知識創造理論（Nonaka & Takeuchi, 1995）に拠れば、知識を創造する主体は“個人”であり、個人の知識創造を増幅する装置として“組織”を捉えている（訳 p88）。従って、知識創造を集団的に追求している組織（例えば研究開発組織）が調査対象となるが、その分析単位は当該組織に所属する個人となる。

個人の知識創造プロセスは、個人の知識が発展的に変化（transformation）するプロセスとして捉えることができる。従って、その過程を発達心理学で用いられている個別的縦断研究法を援用することができる。個別的縦断研究法とは、端的に言えば、個人を単位として定点観測的にデータを収集することで、その発達の軌

跡を追う方法である。

一方、組織を、個人レベルの知識創造を促進する相互作用ネットワーク、ないし物語共有機能として捉えることができる。従って、対象組織に所属するメンバー全員を調査対象者とするのが望ましい。メンバー全員に対し個別にインタビューを行うことで、どのような相互作用が知識創造の促進要因として影響したかを確認することができる。

#### 4.2.2.拡張的学習理論にもとづく事例記述手法

“個人”の知識創造活動は、その個人が属する集団的活動の文脈（場）に大きく依存する（Nonaka & Toyama, 2003）。例えば、新しい自動車の機種開発をミッ

ションとした組織に所属する個人の知識創造活動の志向性は、必然的に新車開発の方向に限定され、同時に相互作用する関係者間のネットワークが構築される。この考え方に立つと、「場」そのものの発展性を個人のそれとは別次元として捉え、それらを関連付ける作業が必要である。そのために効果的な方法として、教育学者の Engeström (2001) による下記の7つの集団的活動形態から成る動的・発達のプロセスである「拡張的移行サイクル」にもとづいた事例分析手法を提案する：1)「問いかけ」により欲求状態を作り出す、2) 欲求状態の歴史的分析和現実的—経験的分析、3) 歴史的に新しいソリューションのモデル化、4) 歴史的に新しい活動モデルの形成、5) 活動モデルの検証、6) 実践過程の省察に基づく活動モデルの再編成、7) 活動モデルを強化した新たな実践。このサイクルは、

下記のように理論的に組織的知識創造プロセス (SECI) モデルに対応づけることができる：1) が共同化に対応、2) が表出化に対応、3) ~5) が連結化に対応、6) ~7) が内面化に対応 (図 4.2.参照)。さらに、SECI モデルと比較すると連結化モードにおける活動形態がより細分化されているため、より厳密な議論が展開できる利点がある。

4.2.1.で示した個的縦断研究法の適用により、理論上は、それぞれの活動状態下における各々の調査対象者の心境に忠実なインタビュー・データを収集することができる。仮に定点観測を行わず、望ましい/望ましくない結果が出た後にまとめて回顧的インタビューを行うと、調査対象者は悪意なく後知恵を働かせてしまい、物事の因果関係を恣意的に変更してしまう (Weick, 1995) リスクが生じてしまう。

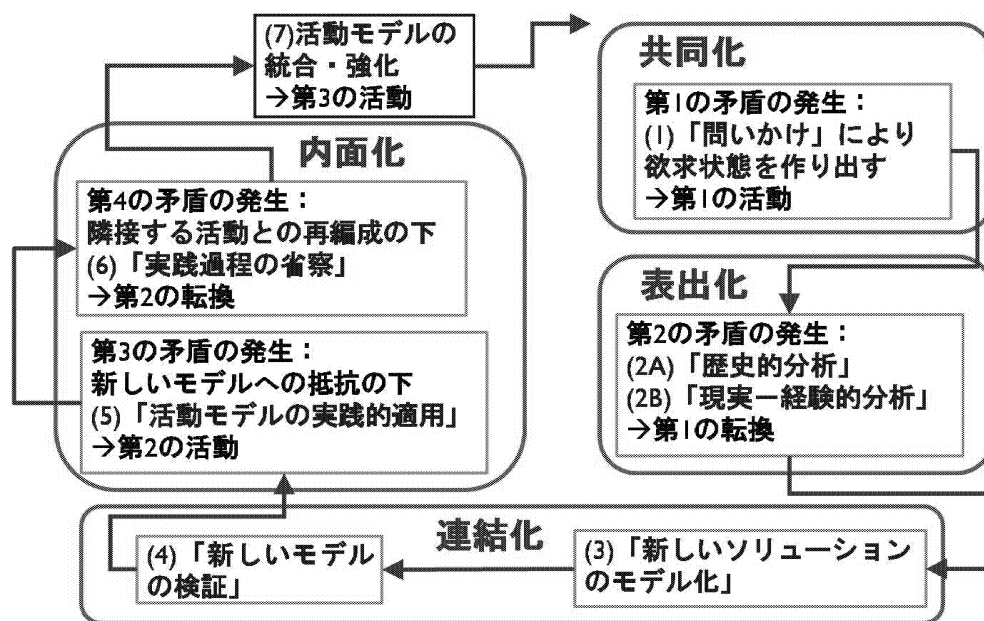


図 4.2.組織的知識創造プロセスと拡張的学習サイクルとの対応付け

### 4.2.3.PAC 分析手法

PAC（個人別態度構造；Personal Attitude Construction）分析手法は、調査者があらかじめ定めた概念に対する反応ではなく、調査対象者自身が定めた概念にもとづき、その意味や概念間の関係性を全体的（holistic）に捉え、調査者、調査対象者が共同で探求していくことが可能なインタビュー手法である。この手法を用いることで、「対話的科学的」にもとづくデータ収集が可能となる。

実際の手順としては、社会心理学者の内藤（1997/2002）によって開発された定型的な手順（図 4.3.参照）に依拠する。日々の研究活動の文脈で自身の考え方やものの見方が変化した際の情景を思い出すよう調査者が指示をし、その指示にもとづいて調査対象者自身が想起した概念（キーワード）とその関係性を、Ward法を用いた階層的クラスタ分析によって可視化する。この可視化作業によって、調査対象者の内的世界を象徴するデンドログラム（樹形図）が作成される（図 4.4.参照）。デンドログラムによって、調査者

が調査対象者によって構成された内的世界に踏み込む手掛りが得られるため、インタビューを通じてデータの解釈を調査者・調査対象者間で間主観的に行うことが可能となる（内藤,1997/2002 p.9）。さらに、調査対象者が思いもよらなかった概念間の関係性の解釈を調査者が試み、提示することで、調査対象者がより深い考察を行うことを促すことが可能となる。

加えて、PAC 分析手法では概念（キーワード）の感情情報を、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの3類型で簡易的に付与することが可能であることから、概念間の論理的な矛盾だけではなく、その背後にある感情的な葛藤にも着目して問いかけを行うことが可能である。組織研究においては、感情を分析対象とした研究蓄積が豊富にあるとは言えない（金井, 2000）。加えて、組織的知識創造研究にいたってはほぼ皆無である（例外は Yoshinaga & Toyama, 2005）ことから、PAC 分析の採用は学術的にも極めて有意義なものであると考えられる。

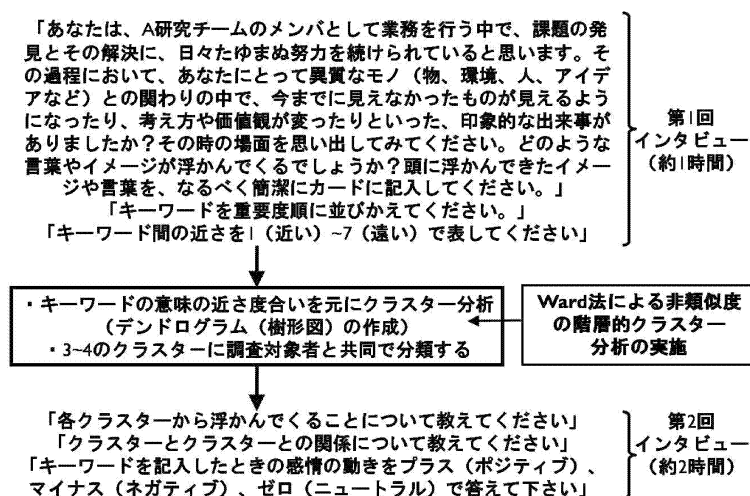


図 4.3.PAC 分析インタビューの手順例（内藤, 1997/2002）

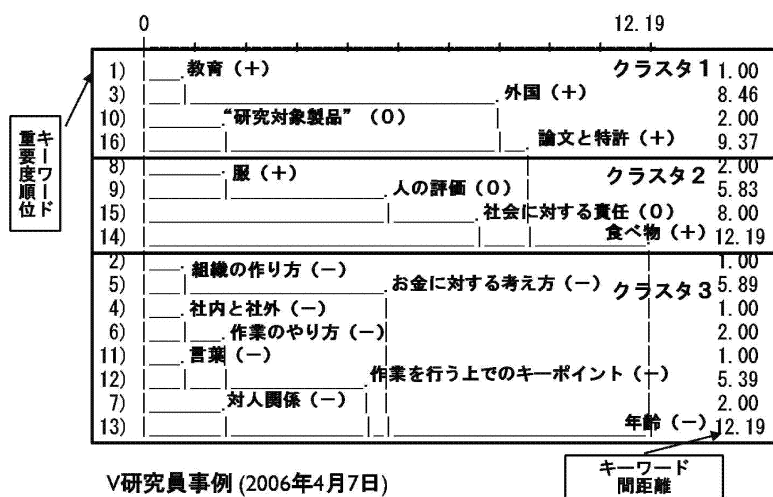


図 4.4.PAC 分析で得られる個別データの全体性（樹形図，内藤，1997/2002）

#### 4.2.4.修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ

上記で触れた個的縦断研究法、拡張的学習理論にもとづく事例記述法、及び PAC 分析手法にもとづくインタビューにより、組織（集団）的活動の諸形態に対応づけられる形で整理された、各個人の知識創造の営みが記述された対話記録を収集することができる。このデータ・セットをもとに、M-GTA を用いて分析を行う。

M-GTA を対象とした批判として、個々のデータの全体性と継時的な流れを考慮することが難しい、との指摘があると先に述べた。しかしながら、前者については、個別の全体性を考慮した PAC 分析手

法との組み合わせにより、後者については継時的な流れを考慮した個的縦断研究法との組み合わせにより、それぞれ補完することができる。特に後者との組み合わせによって、M-GTA にもとづく分析方法の有効性が一層高まると言える。分析対象とする対話記録（テキスト）に時間情報が付与されることで、生成された概念間の関係の発展的変化に対する根拠を十分に確保することが可能になるからである。

M-GTA にもとづく分析作業は、前述したドイツにある VERBI 社が開発した質的データ分析ソフトウェアのひとつである MAXQDA2007 を用いる（作業インターフェイスは図 4.5.参照）。

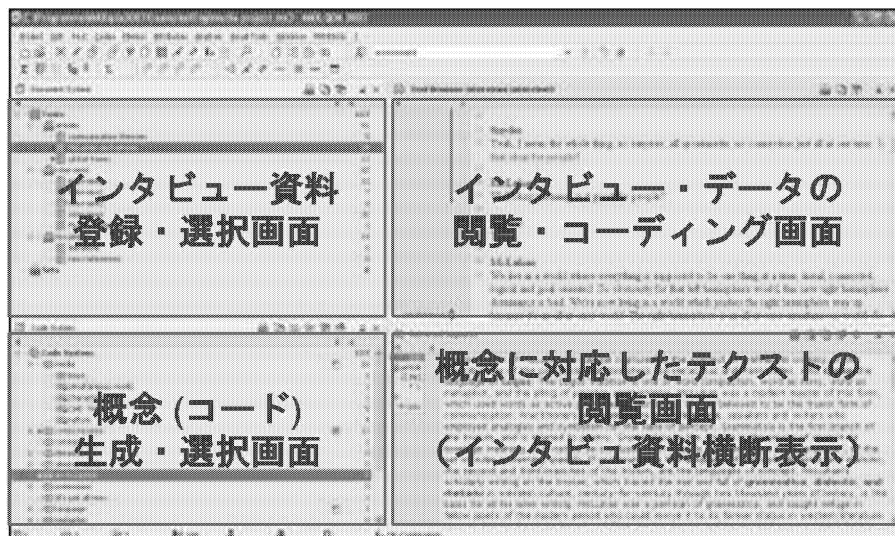


図 4.5. MaxQDA2007 インターフェイス画面

<http://www.maxqda.com/index.php/maxqda>

MAXQDA2007 の作業インターフェイスは、画面が 4 つに分割されている。左上の画面は、分析対象として読み込ませた対話記録のファイルがリストになって表示されており、読み込んだ対話記録ファイルをアクティブ化/非アクティブ化することで、選択的に分析対象にすることが可能となっている。さらに、文書毎に概念（コード）が付与された回数（以下、タグ数）が表示される。

左下の画面は、概念（コード）の生成・管理画面となっている。さらに、概念（コード）は階層的な管理が可能であり、この機能を援用すれば、複数の概念を束ねた上位概念（M-GTA の用語ではカテゴリーに相当する）としての認識も可能である。加えて、概念毎のタグ数が表示される。

右上の画面は、アクティブにしたテキスト・データの中身についての閲覧画面であり、この画面を使用して概念（コード）化作業を進めていく。該当するテク

スト上の意味まとまりを選択し、あらかじめ生成しておいた左下の画面に登録してある特定のコード（概念）にドラッグ・アンド・ペーストすると、当該概念（コード）情報が意味まとまりに付与される。付与情報は、当画面の左部分に表示されるバーで確認できる。ひとつの意味まとまりに複数のコードを付与することや、意味まとまりが部分的に重複したり、方の意味まとまりの内部に別の意味まとまりを設定したりすることも可能である。

右下の画面は、左上の画面でアクティブにしたテキスト・データ内で、左下の画面でアクティブにした概念（コード）が付与された意味まとまりの一覧が自動的に表示される。一覧画面の特定のテキストを選択すると、右上の画面が瞬時に特定のテキストが含まれたインタビュー・データに切り替わり、意味まとまりの前後の文脈を確認することが可能となる。

以上のインターフェイスおよび機能に

より、MAXQDA2007を用いることで、概念（コード）/上位概念（カテゴリー）の生成作業をスムーズに行うことができるとともに、特定の概念（コード）に対応したテキスト・データを横断した意味まとまりの検索を行うことが可能となる。加えて、概念（コード）についてのメモや、作業全体に関するメモを簡単に作成し、参照することが可能である。従って、MAXQDA2007は、M-GTAのコア・ツールとなる分析作業ワークシート（概念名、概念定義、概念に対応したテキストのリスト、概念に関する理論的メモの4つの情報によって構成される）の生成を自動化するとともに、分析ワークシートを動的に閲覧することが可能となる。

実際に概念（コード化）の作業を進めていくと、1つの意味まとまりに対して複数の概念が付与することがある。また、違う概念が付与された複数の意味まとまりが一部重複している場合や、ある意味まとまりの中に別の意味まとまりが内包している場合がある。これらの場合を、複数の概念が同時に生起し“相互に影響している”とみなす。

MAXQDA2007には、コード（概念）間の同時生起数を計測するための機能として、コード・リレーション・ブラウザー（code relation browser）が実装されている。本機能は、概念（コード）間同時生起数のクロス表を出力する。このクロス表を手掛りに、概念間の相互影響関係を推測することができる。概念間の相互影響関係が推測された意味まとまりについて、テキスト検索（text retrieval）機能を使ってその意味内容を直接検証し、

相互影響関係の妥当性を確認していく。

以上の作業を繰り返し、対話記録に埋め込まれた時間情報を考慮しながら、知識創造（ものの見方の発展的変化）に関する概念/上位概念の発展的関係性を明らかにしていく。同時に、知識創造を増幅する装置、すなわちメンバー間の物語の相互作用について、知識創造との関連性を明らかにしていく。このようにして、対象組織の“現場に密着した”形で、知識創造のプロセスモデルを構築し、既存理論との理論的関連性を論ずることが可能となる。

#### 4.3.まとめ

本章では、M-GTAをベースに、様々な領域で開発された研究手法を組み合わせた、独自の組織的知識創造プロセス研究手法を提案し、その詳細について論じた。本手法の限界として、漸次構造化手法を前提としているため生じた分析枠組み構築、データ収集、データ分析の試行錯誤のプロセスを明示しきれない点がある。この課題は、松嶋（2006）が提示した反射性（reflexivity）の概念に対する慎重な導入の検討が必要となる。

### 5.結論

本章では、本論のまとめと、今後の課題と方向性について記述する。

#### 5.1.まとめ

本論では、新たな視点から組織的知識創造研究を推進する目的で、“物語研究”及び“質的研究手法”に関する既存の研究

についてのレビューを基にした理論的・方法論アプローチの解明を試みた。まず理論面については、組織論における物語研究について検討した結果、組織的知識創造理論には、組織学習論、ナレッジ・マネジメント論、組織変革論の3つが密接にかかわり合っていることを明らかにし、それらを横断した理論的アプローチの必要性を示した。さらに、文学や心理学で行われている物語それ自体を対象とした研究について検討した結果、物語が“問いかけ”や“自他の関係”をつなぐものとしての機能を持つことが明らかにし、この2つの視点を組織的知識創造理論に積極的に取り組む必要性を示唆した。その上で、組織的知識創造研究を、「個人と組織を同時に研究対象とし、個人の“ものの見方”の発展的な変化のプロセスと、“問いかけ”や“自他の関係をつなぐ”組織的行為を通じた当プロセス促進要因について明らかにする研究」と定義した。

一方、方法論についてのレビューでは、ポストモダン・パラダイムについて考察を行うとともに、組織的知識創造研究に有効な手法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチについて詳細に考察を行った。さらに、グラウンデッド・セオリー・アプローチを核としながらも、個的縦断研究法、拡張的学習理論にもとづく事例記述手法、PAC分析手法を組み合わせた、組織的知識創造研究に資する独自の科学的方法論を提案した。

## 5.2. 今後の課題と方向性

今後の課題としては、本論で提案した研究手法にもとづく実践によって、その実現

可能性を検証する必要がある。また、研究パラダイムを、より参加型にシフトしていく必要がある。そのために、工学的なアプローチとの融合は有効な手段であると言えよう。つまり、組織的知識創造活動を支援するシステムを導入することにより、そのシステムの工学的な評価のみならず、マネジメントの観点からの評価を行うのである。今まで知識創造理論の研究者は、“価値の創造”を対象としてきた。参加型パラダイムにシフトするということは、研究者にも“価値の創造”への参画が求められる事を意味する。研究者は、自らの行為に対して常に敏感であること、つまり reflectivity (反射性) が求められることになろう。その為の心構え (mind set) はどうあるべきか、を継続して追求していく必要がある。

## [引用文献]

- Barry, D. 1997. Telling changes: from narrative family therapy to organizational change and development, *Journal of Organizational Change Management*, 10-1: 30-46.
- Boje, D. M. 1991a. The storytelling organization: a study of story performance in an office-supply firm. *Administrative Science Quarterly*, 26: 106-126.
- Boje, D. M. 1991b. Consulting and change in the storytelling organization. *Journal of Organizational Change Management*, 4: 7-17.
- Boje, D. M. 1995. Stories of the storytelling organization: A postmodern analysis as “Tamara-land.” *Academy of*

- Management Journal*, 38-4: 997-1035.
- Boje, D. M. 2000. Phenomenal complexity theory and change at Disney: Response to Leticche. *Journal of Organizational Change Management*, 13-6: 558-566.
- Boje, D. M. 2001. *Narrative Methods for Organizational & Commutations Research*. Thousand Oaks, California: Sage Publications.
- Boje, D. M. 2006. Book Review Essay: Pitfalls in Storytelling Advice and Praxis. *Academy of Management Review*, 31-1: 218-225.
- Boje, D. M., & Rosile, G. A. 2003. Comparison of socio-economic and other transorganizational development methods. *Journal of Organizational Change Management*, 16-1: 10-20.
- Boyce, M. E. 1996. Organizational story and storytelling: a critical review. *Journal of Organizational Change Management*, 9-5: 5-26.
- Brannen, M. Y. 2004. When Mickey loses face: Recontextualization, semantic fit, and the semiotics of foreignness. *Academy of Management Review*, 29: 583-606.
- Bryant, M., & Cox, J. W. 2004. Conversion stories as shifting narratives of organizational change. *Journal of Organizational Change Management*, 17-6: 578-592.
- Campbell, J. 1949. *The Hero with a Thousand Faces*. New Jersey: Princeton University Press. (平田武靖・浅輪幸夫監訳 1949. 千の顔をもつ英雄上・下. 人文書院)
- Collins, D., & Rainwater, K. 2005. Managing change at Sears: a sideways look at a tale of corporate transformation. *Journal of Organizational Change Management*, 18-1: 16-30.
- Czarniawska, B. 1997. *Narrating the Organization: Dramas of Institutional Identity*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Denning, S. 2001. *The Springboard: How Storytelling Ignites Action in Knowledge-Era Organizations*. Boston & Oxford: Butterworth-Heinemann.
- Denning, S. 2004a. Telling tales. *Harvard Business Review*, 82-5: 122-129.
- Denning, S. 2004b. *Squirrel Inc.: A Fable of Leadership Through Storytelling*. San Francisco: Jossey-Bass. (富田ひろみ訳 2005. チームリーダー: GE、IBM、シエル、マクドナルド、アメリカ陸軍—コンサルタントの極意. 不空社)
- Denning, S. 2005a. Transformation innovation: A journey by narrative. *Strategy & Leadership*, 33-3: 11-16.
- Denning, S. 2005b. *Leader's Guide to Storytelling: Mastering the Art and Discipline of Business Narrative*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Denning, S. 2006. Effective storytelling: strategic business narrative techniques. *Strategy & Leadership*, 34-1: 42-48.
- Denzin, N. K., & Lincoln, Y. K. (eds.) 2000. *Handbook of qualitative re-*



- search, second edition*. Thousand Oaks, California: Sage Publications. (平山満義監訳, 古賀正義・岡野一郎編訳 2006. 質的研究ハンドブック〈1巻〉質的研究のパラダイムと眺望, 平山満義監訳, 藤原顕編訳 2006. 質的研究ハンドブック〈2巻〉質的研究の設計と戦略, 平山満義監訳, 伊藤勇・大谷尚編訳 2006. 質的研究ハンドブック〈3巻〉質的研究資料の収集と解釈. 北大路書房, 2006.)
- du Toit, A. 2003. Knowledge: a sense making process shared through narrative. *Journal of Knowledge Management*, 7-3: 27-37.
- Engeström, Y. 2001. Expansive Learning at Work: toward an activity theoretical reconceptualization, *Journal of Education and Work*, 14-1: 133-156.
- 藤井貞和 2004. 物語理論講義. 東京大学出版会.
- Glaser, B., & Strauss, A. 1965. *AWA-RENESS OF DYING*. New York: Aldine Publishing. (木下康仁訳 1988. 死のケア理論と看護—死の認識と終末期ケア. 医学書院)
- Glaser, B., & Strauss, A. 1967. *The discovery of grounded theory: Strategies in qualitative research*. London: Wiedenfeld and Nicholson. (後藤隆・水野節夫・大出春江訳 1996. データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか. 新曜社)
- Gold, J. 1997. Learning and story-telling: the next stage in the journey for the learning organization. *Journal of Workplace Learning*, 9-4: 133-141.
- 林吉郎 2004. ポストモダン研究方法: 6眼のパラダイム・シフト, 青山国際政経論集, 62, 203-217.
- 犬塚篤 2005. 情報の多義性削減プロセスに関する実証的解釈, 組織科学, 38-4, 66-79.
- 金井壽宏 2000. 経営組織論における感情の問題—一人びとが組織に持ち込む感情をめぐるリサーチ・アジェンダー. 国民経済雑誌, 181-5: 43-70.
- 河合隼雄 1993. 【講演集】物語と人間の科学. 岩波書店.
- Keursten, P., Verdonschot, S., Kessels, J., & Kwakman, K. 2006. Relating learning, knowledge creation and innovation: case studies into knowledge productivity, *Int. J. Learning and Intellectual Capital*, 3-4, 405-420.
- 木下康仁 1999. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的実証研究の再生. 引文堂.
- 木下康仁 2003. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 引文堂.
- Kunda, G. 1992. *Engineering Culture: Control and Commitment in a High-Tech Corporation*. Philadelphia: Temple University. (金井壽宏解説・監修, 樫村志保訳 2005. 洗脳するマネジメント—企業文化を操作せよ. 日経 BP社)
- Kupers, W. 2005. Phenomenology of embodied implicit and narrative knowing. *Journal of Knowledge Management*, 9-6: 114-133.

- Langer, R., & Thorup, S. 2006. Building trust in times of crisis: Storytelling and change communication in airline company. *Corporate Communications: An International Journal*, 11-4: 371-390.
- Linde, C. 2001. Narrative and social tacit knowledge. *Journal of Knowledge Management*, 5-2. 160-170.
- 松嶋登 2006. 経営学における技術研究の理論的射程, 科学技術社会論研究, 4, 15-28.
- Milne, P., & Callahan, S. 2006. ActKM: the story of a community. *Journal of Knowledge Management*, 10-1: 108-118.
- Morgan, S., & Dennehy, R.F. 1997. The power of organizational storytelling: a management development perspective. *Journal of Management Development*, 16-7: 494-504.
- 永田晃也 2000. 知識創造プロセスにおける開発リーダーの機能, ビジネスレビュー, 47-3, 13-29.
- 内藤哲雄 1997/2002. PAC 分析実施入門 [改訂版]—「個」を科学する新技法への招待. ナカニシヤ出版.
- Nonaka, I., & Peltokorpi, V. 2006. Visionary knowledge management: the case of Eisai transformation, *Int. J. Learning and Intellectual Capital*, 3-2, 109-129.
- Nonaka, I., & Takeuchi, H. 1995. *The Knowledge-Creating Company: How Japanese Companies Create the Dynamics of Innovation*. New York: Oxford University Press. (梅本勝博訳 1996. 知識創造企業. 東洋経済新報社)
- Nonaka, I., & Toyama, R. 2003. The knowledge-creating theory revisited: knowledge creation as a synthesizing process. *Knowledge Management Research & Practice*, 1: 2-10.
- Nonaka, I., & Toyama, R. 2005a. The theory of the knowledge-creating firm: subjectivity, objectivity and synthesis. *Industrial and Corporate Change*, 14-3: 419-436.
- 野中幾次郎・遠山亮子 2005b. フロネシスとしての戦略. 一橋ビジネスレビュー, 53-3: 88-103.
- Nonaka, I., Toyama, R., & Konno, N. 2000. SECI, Ba and Leadership: a Unified Model of Dynamic Knowledge Creation. *Long Range Planning*, 33: 5-34.
- 野中幾次郎・遠山亮子・紺野登 2004. 知識ベース企業理論—戦略経営のダイナミックな進化に向けて. 一橋ビジネスレビュー, 52-2: 78-93.
- 能智正博 (編) 2006. “語り”と出会う—質的研究の新たな展開に向けて. ミネルヴァ書房
- 小倉啓子 2005. 特別養護老人ホーム入居者のホーム生活に対する不安・不満の拡大化プロセス—“個人生活ルーチン”の混乱. 質的心理学研究, 4: 75-92.
- Parkin, M. 2004. *Tales for Change: Using Storytelling to Develop People and Organizations*. London: Kogan Page.
- Pentland, B. T. 1999. Building process theory with narrative: From descrip-

- tion to explanation. *Academy of Management Review*, 24-4: 711-724.
- Peltokorpi, V., Nonaka, I., & Kodama, M. 2007. NTT DoCoMo's Launch of I-Mode in the Japanese Mobile Phone Market: A Knowledge Creation Perspective. *Journal of Management Studies*, 44-1: 50-72.
- Propp, V. A. 1928. (原著露語 北岡誠司・福田美智代訳 1987. 昔話の形態学. 白馬書房)
- Rhodes, C., & Brown, A. D. 2005. Narrative, organizations and research. *International Journal of Management Reviews*, 7-3: 167-188.
- 桜井厚・小林多寿子 (編) 2005. ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門. セリカ書房.
- 西條剛央 2005. 構造構成的発達研究法とは何か?, 西條剛央編 構造構成的発達研究法の理論と実践—縦断研究法の体系化に向けて, 2-33, 北大路書房.
- 戈木クレイグヒル滋子 2005. 質的研究方法ゼミナール—グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ. 医学書院.
- 戈木クレイグヒル滋子 2006. ワールドマップ グラウンデッドセオリー・アプローチ—理論を生み出すまで. 新曜社.
- 斎藤清二・岸本寛史 2003. ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践. 金剛出版.
- 佐藤郁哉 2002. フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる. 新曜社.
- 佐藤郁哉 2006. 定性データ分析入門—QDAソフトウェア・マニュアル. 新曜社.
- 妹尾大・阿久津聡・野中郁次郎(編著) 2001. 知識経営実践論, 白桃書房.
- Strauss, A., & Corbin, J. 1998. *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory, second edition*. Thousand Oaks, California: Sage Publications. (操華子・森岡崇訳 2004. 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 第2版. 医学書院)
- Simmons, A. 2001. *The Story Factor: Inspiration, Influence, and Persuasion Through the Art of Storytelling*. New York: Basic Books.
- Srinivasan, R. 2004. Knowledge architectures for cultural narratives. *Journal of Knowledge Management*, 8-4: 65-74.
- Taylor, S. S. 1999. Making sense of revolutionary change: differences in members' stories. *Journal of Organizational Change Management*, 12-6: 524-539.
- Underwood, P. 1983, 1984, 1991, 1994. *Three Native American Learning Stories & Three Strands in the Braid*. (星川淳訳 1998. 知恵の三つ編み. 徳間書店)
- Voglar, C. 2000. *The Writer's Journey: Mythic Structure for Writers, second edition*. Studio City California: Michael Wiese Productions. (岡田勲監訳 講元美香訳 2002. 夢を語る技術 5 神話の法則—ライターズ・ジャーニー. 愛育社)
- Weick, K. E. 1995. *Sensemaking in Or-*

- ganizations*. Thousand Oaks, California: Sage Publications. (遠田雄志・西本直人訳 2001. センスメーカーキング イン オーガニゼーションズ. 文真堂)
- Wilber, K. 1998. *The Marriage of Sense and Soul: Integrating Science and Religion*. New York: Random House. (吉田豊訳 2000. 科学と宗教の統合. 春秋社)
- Wooffitt, R. 1992. *Telling Tales of the Unexpected: The Organization of Factual Discourse*. Harvester Wheatsheaf: Hemel Hempstead. (大橋靖史・山田詩津夫訳 1998. 人は不思議な体験をどう語るか—体験記憶のサイエンス. 大修館書店)
- やまだようこ (編) 2000. 人生を物語る—生成のライフストーリー—. ミネルヴァ書房
- Yoshinaga, T., & Toyama, R. 2005. Process of Knowledge Reconstruction after Experiencing Failure – A Case Study on R&D Projects at a Corporate Laboratory. *International Journal of Knowledge and Systems Sciences*, 2-1: 53-59.